

さくらやま便り

No.329 号

2022年（令和4年）2月15日



スタッフのご挨拶



二月に入ってから寒さが一段と厳しくなり、春の到来が待ち遠しいこの時期です。皆様お元気にお過ごしですか。

先週後半に降った雪は、大きな被害を出すこともなくホッとしているところです。今年は昨年と違って寒さばかりでなく、降雪量も多いと予報されていますので、まだまだ気が抜けませんね。ケアハウスの場合は泊りの職員がおりませんので、雪が降った翌朝の出勤が一番の課題です。朝食の準備に影響が出ないように、職員は這ってでも出勤する覚悟しております。

さて、今月は皆様にお伝えしたいことがいくつかありますので、巻頭文は短めにしたいと思います。

3月と言えば「旅立ち」、4月は「出会い」という言葉が春のイメージでもありますが、今月号では、おふたりの職員の退職と入職のお知らせを致します。それぞれの挨拶文をご紹介します。

施設長 村本英邦

【退職】 令和4年2月28日付

友枝 琢也



この度、一身上の都合により退職することになりました。在職中は皆様大変お世話になりました。思い返せば、入社した

頃は何事も不慣れで仕事も思い通りにこなせず、失敗することも沢山ありました。しかし皆様の優しい言葉や温かいお心遣いに励まされて乗り越えることが出来ました。何よりも、若輩者の私に多くのことを教えて下さったことに心から感謝申し上げます。新しい職場でも、シャローム桜山での貴重な経験を生かして頑張つて参ります。

皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

【入職】 令和4年3月1日付

坂本 成子



坂本成子（なるこ）です。上州群馬で生まれ育ちました。赤城山や利根川をながめて過ごしました。主人の仕事の関係で、横浜の上川井町に移り住んで21年になります。家族は主人と娘が二人、そして15歳になる犬が1匹です。好きなことは、山や湖へドライブに出掛けることです。箱根や富士五湖が特にいいですね。田舎育ちなので自然の中はホッとします。

以前にもケアハウスで働いたことがあります。が、暫く栄養課で業務をしていましたので久しぶりの復帰になります。再び戻ってくる事が出来てとても嬉しく思っています。慣れるまで心配ですが、どうぞ宜しくお願い致します。

金元知子

寒さに弱いのに二月に生まれた。ワンちゃん
は苦手なのに犬年に生まれた。

上下共に厚着で、入居者の多くは一枚だけ
と聞いて驚いているが、下腹がポッコリ出た
りしていない。

「お金ためこむならいいが不要なものはポ
イしたら？」と言ったら簡単にポイ出来ない
苦労をいっぱい聞いた。

すごい苦労を皆笑い乍ら話してくれた。

「私はそんな所ふくれてないよ」と言っ
て厚着の下のお腹を見せたら、冷たい手でピタン
とさわって本当だと言う。

「うう寒！冷たいよう！」

今回はその詳細編！ 興味深い大事な事。



大畑繁雄

恥おほき

生涯なりきと

言うなかれ

終わりよければ

すべてよしとや

小坂 宣雄

兄が中学に上がる年には、錦州市には日本
人中学校は未だ無かった為、当時の奉天市
(現在の瀋陽市)の奉天一中に入学し寄宿舎
生活を始めましたが、従姉一家が大連に住ん
で居ましたので、週末には時々大連に行き、
幼馴染のレイ子さんと会って居た様でし
た。

しかし従姉のご主人が奉天に転勤となり、
一家が転居して来た為、その後はレイ子さん
とは文通交際をしていた様でした。

たまたま兄が中学生になった翌年、錦州市
にも日本人用中学が開校されていましたの
で、父親は費用の問題もあったのでしよう、
兄が四年生に進学する時に錦州に呼び戻して

三年生をダブらせて自宅からの通学をさせ始
めました。

それで、自宅からはレイ子さんと文通は出
来にくかったのでしょう、ヒ・ト・ニシ・キ
と書く事で気を紛らわせていたのでしょう。

関連する話ですが、七年前に亡くなった実
弟、辻守雄の一人息子、照雄は子供の頃より
「僕は戦死した伯父、治雄の生まれ変わり
だ！」と常々発言する変わった子供でした。
つい最近分かった事は、彼の誕生日は、月は
異なりますが十九日、亡兄の戦死した(一
月)十九日と同じでした。この様な偶然もあ
るものですネ！



2月生まれの皆様

- | | | | |
|-----|----|----|---|
| 1日 | 大畑 | 繁雄 | 様 |
| 3日 | 進藤 | 敦子 | 様 |
| 4日 | 土田 | 嘉代 | 様 |
| 20日 | 金元 | 知子 | 様 |
| 20日 | 鈴木 | 久恵 | 様 |

おめでとうございます。
お健やかな毎日をお祈り致
します。

を形にするには、互いの知恵と努力、そして時には犠牲が欠かせない。

下山して駅に着いたのは夜だった。誰もいない待合室の隅で身づくろいをしていると、かの若者が一人で来た。「切符を買いに来た」と言う。この時間は電車の中で買うようだとと言うと、肩をすくめた。妻のことを聞くと、

「疲れた、と言って途中で休んでいる」と笑いながら答えると、今来た道に戻って行った。

夜道に消えて行く若者の大きな背を目で追いながら、なぜか心が和んだ。不二

事務所からのご連絡

お食事準備中の衛生管理について

感染症の拡大を防止するために、現在、館内の衛生管理を徹底しております。特にお食事の準備をしている時間帯は、レストランへの出入りはお控え下さいますようお願い致します。なお、ケアハウスのスタッフは、施設長以下すべて保健所への申請を済ませておりますのでご安心下さい。

お食事の準備時間は左記の通りです。

朝食準備時間（6時30分～8時00分）

昼食準備期間（11時00分～12時30分）

夜食準備期間（16時00分～17時30分）

お風呂のお湯の白濁職について（経過報告）

浴槽の白濁色については、その原因が細かい気泡によるものと判明しています。現在、保守管理を契約している業者、及びメーカーへの問い合わせを行い、原因解明を急いでいます。

現在、塩素は十分に注入されていますので水質に問題はありませんが、浴槽の細かい気泡がなぜ混入しているか調査中です。メーカーの説明によれば、考えられる原因は次の2つです。

①排水管、給水管を含む濾過システムの不具合。
②経年によるポンプの劣化による不具合。

フロア別入居者懇談会の開催

コロナ禍で休会中の「入居者懇談会」を昨年10月に開催しましたが、次回の開催は令和4年3月を予定しています。日時は追ってご連絡いたします。

コロナ禍ですので基本は自由参加です。懇談会の内容は後日、皆様にご報告しますので無理のない範囲でご参加下さい。

新入居のお知らせ

304号室 塚本 政子様 令和4年2月2日
心より歓迎致します。

避難訓練の結果報告

1月26日に行われた夜間の火事を想定した避難訓練（特養出火）では、ケアハウスの現状に照らして幾つかの課題が見えました。コロナ禍で「入居者懇談会」が開催されず、新しく入居された皆様は有事の際の安全確保について十分な説明がなされないうままでした。

この状況を解決するために、次回のフロア別懇談会では、確認された課題について皆様と一緒に考えたいと思います。

詳細につきましては3月開催予定の「フロア別懇談会」でご報告し、必要な情報を共有したいと思えます。

【見えた課題】

1. 有事の際の連絡方法
2. 有事の際の内、外階段の使い方
3. 車いす利用者の避難方法
4. 各階の防火扉のシステムについて
5. エレベーターの利用について
6. 放送内容（日中・夜間）
7. 震災時の避難場所の確認

生活相談員から

収入申告を行います

年金の書類（はがき）、通帳、医療費のレシート等の提出をお願いします。ご不明な点は生活相談員、事務担当にご相談下さい。

「ダイジョウブデスカ」

なまりのある呼びかけに、道端の太い赤松の倒木に仰向けに休んでいた私は、目を開けて声の主を見た。長身で赤ら顔の若者だった。直感で米軍の兵士か軍属だろうと思った。山梨県の三つ峠に登った日の朝のことだ。

山と同じ名の小さな駅を出ると、登山口まで長い道路が続く。だが、登山道に入るとすぐに急な登りだ。名は「峠」だが登りごたえのある立派な山である。若者は、私が登山道で出会った最初の人だと言い

「イッショニノボリマセンカ」

と誘ってきた。「私は足が遅いからお先にごうぞ」と答えたが意にも介さず話しかけてくる。しかも一緒に来た妻が「疲れた」と言いつて歩かなくなったので、そこに置いてきた、と言

うのである。これには私も驚いた。

「あなたがそこに戻った時、奥さんがいなければどうするの？」と言うと、

「ソノトキハソノトキネ」

と大声で笑った。つられて私も笑ってしまったが、他人事ながら気になった。先を行っていた彼が、大きな迷子石のあるところで立ち止まった。私がそこに着くと、立札にんと書いてあるかと聞くので「ふじいし」だと答える。すると折り返し意味を聞いてきた。

「他の石とは違う、二つとはない石」という意味だろうと思いつくまま答えた。すると彼は

「シゼンノイシ、ミナチガウノアタリマエネ」

と言い、肩をすくめた。

「ジャアネ」そう言うと彼は、大股で登り始めすぐに見えなくなった。私は、急登に歩を進めながら、若者の言葉を反芻していた。「シゼンノイシ、ミナチガウノアタリマエネ」

背のザックは重く、足もしかり。しかし頭だけは根拠もないことを考え、疲れることもない。単独行の楽しみの一つでもある。

「違う」や「同じ」が自然の石の話である間は何の問題もない。だが、ひとたびこのことが

「人」に関わってくると、時には複雑になる。少子高齢化による人材不足の対応策として、国は女性の活用、子育て支援、障がい者雇用促進、高齢者や外国人の活用を打ち出した。そして、その根拠として後付けで喧伝し始めた感のある「多様性」のことである。

青年時代に日本を出て、三十年余り、北米、中米、南米で生活した。一九七十年代後半には北米の西海岸にいた。「多様性」という考え方が生まれたのが、その地域と時代であったことを知ったのは、最近のことである。

確かに、そのころのサンフランシスコ周辺は、見た目にもごった返していた。多様な文化が混在していたとも言えるだろう。ヒッピー、技術者、研究者、投資家、音楽家や芸術家

たちや、ベトナム戦争帰りの若者たちもいた。

そんな人々の間に、人種や価値観の違いを超えて、アイディアを出し合い、発想を掛け合わせ「世界を変えよう」という動きが生まれた。その結果、コンピューターを駆使する新しい世界が、シリコンバレーを中心に幕を開けたのである。

つまり、本来の「多様性」とは、異なる視点や条件を単に容認するだけでなく、それらを掛け合わせて、社会をより豊かにする未知の発想にたどり着く文化、あるいは、精神のあり方を指す表現なのだ。

言うまでもなく、かの国は移民が作り上げてきた「チガウノアタリマエ」の国である。しかし、「違い」は扱い方一つで排除、差別、分断をもたらす。

一方、「違い」と「間違い」が同じ文字で表されるわが国では、「多様性」にはいまだリスクが伴う。それではどうすればいいのか。キーワードは「連帯感」だと私は思う。確かに人は違う。しかし、一方では、ただ人であると言うだけで、共通点が多々あるのも事実である。

たとえば、その表現の仕方は異なっている、喜怒哀楽の感情は、人種や文化に関係なく、全ての人々に共通することを私は見てきた。多様な人々を結びつけ新しい何物かを創るのは連帯感であり共感だと思う。だが、それら